

「チャペルの思い出」

昭和20年（1945年）中学部卒 田中 宏

今年の1月末まで、明治学院横の国道1号線を通って虎ノ門の特許事務所に車で通勤していた関係上、毎日明治学院のチャペルを眺めることができた。五反田から高輪台の坂を上り、明治学院の交差点まで来ると、必ず信号は赤となりストップすることとなる。この信号を止まらずに無事に通過することはない。そして、その都度、左前方にチャペルの十字架の塔を眺めることとなった。ある時は銀杏の茂みの中から、また、ある時は葉を落とした枝の間から突出しているチャペルの先端を眺めながら、随分昔の中学生時代の自分が思い出される。

自分が明治学院中学部に通っていた1941年から1945年は丁度日米戦争の戦時下であり、何となくミッションスクールは世間から冷たいような目で見られている時代でもあった。しかし、毎朝チャペルで行われた礼拝から始まるその学校内での一日は自分にとっては楽しい学園であった。チャペルの固い木製のベンチに座り、院長先生の説教を聞き、讃美歌を歌い、祈りを捧げる場所としてのチャペルは通常の学校の講堂とは異なった崇高な場所のような気がした。

このような崇高な場所を自分はいとも簡単に動き回ることができた。というのは中学生時代、友達に誘われるまま、人前で話すのが苦手にも拘らず弁論部に入部した。当時弁論部はチャペルの教壇に向かって右側の袖の部分部室として使用しており、そのためある時はチャペル内の好きな場所から教壇を仰ぎ見、また、ある時は何の躊躇もなく教壇の上からチャペル内部全体を見下ろしたりし、自分にとっては本当に身近な場所でもあった。

自分にとって最も感激した思い出は、戦後間もない頃このチャペルで世界的に有名なバリトン歌手フィッシャー＝ディスカウのリサイタルが行われたことである。シュベルトの歌曲「冬の旅」全曲を直に聞くことができ、まったく感激した。最後の「辻音楽師」を歌い終わるや会場の全員からアンコールを求める拍手がいつまでも鳴りやまなかった。ただ、その後この思い出が何かの思い違いではないかというような気がしだした。というのはあまりにも昔のことであり、音響効果の良くないチャペルがどうして著名なフィッシャー＝ディスカウのリサイタルの会場になったのか、或はこのリサイタルをどのようにして知ったのか、また、どのようにしてそのチケットを得たのかということが全く思い出せないからである。

そこで、このことを友人に話したところ、その友人はインターネットで調べてくれた。その結果、フィッシャー＝ディスカウが初来日したのは、昭和38年（1963年）で日生劇場でベルリン・ドイツ・オペラ「フィデリオ」のドン・フェルナンドを演じたとのこと、この時はダブルキャストで初日のみ出演しその合間を縫って京都と東京でリサイタルを行ったとのこと、その後十数回にわたって来日したとのこと、しかし、残念なことに来日の全リサイタルの記録は不明であるとのことでした。従って、この思い出は幻であるかもしれないが、今でも自分の貴重な思い出として残っている。

現在、虎ノ門再開発のため事務所を移転し、もう毎日チャペルを眺めることが出来なくなったことは残念である。しかし、チャペルの光景はいつまでも自分の胸の中には残っており、これは明治学院卒業生全員も同様であろう。

平成28（2016）年2月27日記